

読書感想文入賞作品

『夜のかくれんぼ』より「勝負」 星新一 著

支配された世の中

1 M 大前 雄也

星新一氏の『夜のかくれんぼ』に収録されている、「勝負」というストーリーを読んだ。エフ博士という人物が、機械に支配された世の中を変えるため、コンピューターが徐々に異常になる伝染病菌を開発する。しかし、裏の世界では人間がコンピューターの指示に忠実に従うようになる薬が開発され、食品などに混ぜられる。この二つが同時に出回り、人々は異常なコンピューターの指示に従ってしまう。エフ博士までも。というストーリー。

このストーリーは、実に今の世の中を風刺していると思う。現に今、自分自身は様々なものに縛られて生きている。コンピューターは分かりやすい例だ。自分の生活を見返してほしい。多かれ少なかれコンピューターや、携帯電話といった端末などに依存しているはずだ。毎朝テレビから流れるニュースをそのまま鵜呑みにして納得するのだから、みんなそうだ。そんなことはないと思う人はすでに薬が効いてしまっているのだろう。

しかしながら、機械やコンピューター、メディア端末などといったものを利用するのは、悪いことではない。生活の助けとなり、なにより便利なのだから、むしろ良いことだ。もし今、身の回りの機械がすべて止まり、コンピューターやメディア端末がなくなれば、我々は何もできないはずだ。問題はそれをどう使いこなすかといったところにある。

今の世の中は、「コンピューターが人間を支配する」ようになってしまっている。なぜそれがいけないのかというと、機械の存在が一番上になれば、それを管理する者がいなくなるということ。それはとても恐ろしいことだと思う。感情のないものが支配する世の中など……。

たくさんのメディアに彩られたこの世の中。メディアに支配されるなというのは難しいかもしれない。しかし、すべてをコンピューターに任せた人生

などおもしろくない。人とふれあうことの楽しさや喜びを知った上で、コンピューターなどのメディアを利用することができれば、もっともっとそれらの可能性も広がると思う。人としての感情をもってメディアを利用するのと、無感情のままメディアに利用されるのでは大きく異なる。メディアに限らず、例えば勉強も同じようなことがいえる。何の感情もなくただやらされる「受動的」な勉強は、どうしても楽しくない。逆に、何かに興味を持ち、深めようとする「自発的」な勉強は、自然と楽しいといった経験がある。スポーツでもそう。実際にプレーしてみ、楽しさを知ることができれば、スポーツというメディアを使って、仲間やライバル、目標といったものを得ることだってできる。そして、我々はそれを知っている。

人間とコンピューター、どちらが支配するのか「勝負」するのではなく、感情ある人間が、感情なきコンピューターを利用し、使いこなすことができれば、コンピューターなどのメディアは感情を持つことができるのかもしれない。だって、幼いころは、人形と心を通わせ、喋っていたのだから。だったら最初から、人間とコンピューターとの間に「支配」という関係など存在しないのかもしれない。いや、きっとそうだ。だから、エフ博士の伝染病菌と、人間とコンピューターとの関係を壊す薬が開発されないことを願おう。

『エイジ』重松清 著

大人に近づく子供

- 『エイジ』を読んで -

1 M 松内 秀直

体育館倉庫の写真の真ん中にエイジと書かれた表紙を見て、なんだか格好良く思い、読んでみることにした。

物語はクラス委員の選挙の場面から始まる、語り手はすべて主人公である高橋栄司の主観で描かれ、そのとてもリアルな栄司の感情や心境に夢中になり、

完全に『エイジ』の世界に入り込んでしまった。

子どもだって人は人なのだ、その点では大人と変わりはないと思う。多くのことを感じ、そして悩む、それは僕自身この身をもって分かっている。友達のことや好きな子のことそして、家族のこと。いろいろなことを経験するこの時代は、なんと言うか、とても苦しい。それがあまりにひどいと、全てのつながりを切ってしまいたくなってしまふ。つまりキレルということだ。栄司も自分をとり巻く世界からキレようとする。そして、その栄司に僕はとても共感できた。

自分を重病人、自分のつながりを体につながれたチューブだという表現がとても分かりやすく、個人的に栄司が学校を飛び出し、自転車に乗った場面の「ペダルを強く踏み込んだ。プチプチプチプチッと、チューブがちぎれていく。ぼくはどんどん身軽になる。」という表現が好きだ。自転車の速度が上がっていくのを表現すると同時に、栄司の心の爽快感を表現している。栄司は自分とつながるものをどこまで切りたかったのだろうか。僕は栄司と自分を重ねて読んでいたが、そこだけははっきりと重ならず、栄司の心を読み取ることができなかった。どこまで大事なものと自分を切ってしまいたかったのだろうか。ここは人それぞれ個人差があるのだろうか。あって当然だと思っている。しかし、どこまで切ろうとしようがつながりというものは常識的に切れない、栄司はこのことに気づいたのだ。

切ろうとしても切れないことに人は切ろうとして気づく。この本を読んでこのことにとっても感動した。栄司もそうだったのだろう。学校を飛び出した後、遠くまで行ったが、結局おさまり、家に帰っている。それからまた、普通の生活に戻るのだろう。

切れたものは元にもどるだけでなく、また切れないようにより強くなるのだと思う。栄司はそのサイクルの中でまた一つ強くなった。これは栄司だけではないことは確かだ。栄司が強くなる事によって、周りの人々も強くなったように、栄司もまた周りの人々の影響によって強くなるのだと思う。

栄司はこれからもキレしてしまうかもしれない、しかし、栄司にはその中でまた、自分を強くして乗り切り、いい大人になってもらいたい。

『なぜ分数の割り算はひっくり返すのか?』板橋悟 著

僕の数学への考え方

- 「なぜ分数の割り算はひっくり返すのか?」を読んで -

11 辻 悠一郎

数学 = 理系ではない。この本を読んで一番初めに感じたことだ。この奈良高専に入学して四ヶ月が過ぎたが、つくづく高専は理系だと思う。理系と文系では習う教科が違い、数学は間違いなく理系に含まれるだろう。しかし、文系に進んだものが全く数学を使わないことはありえない。生活の中で数学は生きている。これをわかりやすくこの本は伝えてくれた。

本文中にこのような言葉が出てくる。「因数分解で、痩せる！」なんのことがさっぱりわからなかったが、読んでいくうちに、何のために痩せたいのか、痩せたいなら痩せるために何をすべきか、など、痩せるという目的を要素に分解していき、痩せるためには自分が何をすればいいのかを明確にすることでダイエットが続くということだと分かる。テストの問題でしかなかった因数分解がこれで一つ、ダイエットというかたちで生活とつながった。

僕はあまり数学が得意でなく、なぜ数学を勉強しないといけないかわからないままだった。普段は使わない記号や計算式。覚えても生活には関わりのない公式の数々。しかし、この本を読むと、数学が僕たちの生活や社会に大きく関わっているとわかる。このことがわかると、数学の問題を抽象的なものから、僕たちの生活と関係した現実的なものとして見ることができ、数学の問題に取り組みやすくなる。また、このような数学的思考は物事を順序立てて、論理的に考えることにもつながり、現代社会で必要とされているロジカルシンキングを手に入れることもできるのではないだろうか。

あらゆる作業が機械化され、コンピュータで制御されるようになった現代で、今、人々に求められているのは考える能力ではないだろうか。考える能力を身につけるためには、数学的思考を使う必要があると思う。ではどうすれば数学に興味を持つことができるのか。これもやはり数学を身近なものとして

つけて考えることが重要だろう。「数学は大人になって何の役にたつのか」「日常生活で数学がどんな風に使われているか」を自分の体験の中から見つけだし、考え、人に教えてもらう。こうすれば数学という教科にもっと興味が持てるのではないか。

僕はこの本を読んで、以前は数学のことを「ただ公式を覚えて計算する学問」として考えていたが、「日常生活の中で無意識のうちにやっている数学的な物の見方や頭の使い方での計算する学問」という考えに変わった。数学が嫌いだという人には是非読んでもらいたい。きっと、数学への価値観が変わると思う。

『風が強く吹いている』三浦しをん 著

ハイジと走に学んだこと

- 『風が強く吹いている』を読んで -

1C 山本 峻也

「俺たちみんなで、頂点を目指そう。」

ハイジが言ったその一言で箱根駅伝に向けて走り出した竹青荘の十人。時に仲間とぶつかり合い、時に『走る』ということについて考え、仲間との絆も深めあって、無謀だと思われた箱根駅伝に出場する…。

僕はこの本を読んで、二つわかったことがある。『走る』ということについてと、仲間の大切さだ。『走る』ということについて、僕も以前、陸上の長距離をやっていたので、ハイジや走たちの気持ちがよくわかる。『走る』ことの基準を速さとして考えるなら、頂点をとれる人は一人しかいない。しかし一番になるならないを別にして、走り続ける人はたくさんいる。ハイジが走に「長距離選手に対する一番の褒め言葉は『速い』ではなく『強い』だ」という話があったが、それは、たとえ一流のランナーでも、市民ランナーでも、目標に向かって走り続けてきた努力は変わらない。自分と向き合いどれだけ走り続けてきたかが、タイムよりも栄光よりもすごいことなんだということを伝えたかったのだろうと思う。

仲間の大切さについては、この本のケンカのシーンでわかったことがある。どうしてもタイムが伸びない王子に対して、走が「もっと練習しろ！」とクレームをつけた時にハイジが走に対して怒ったシー

ンだ。この時ハイジは、

「いいかげんに目を覚ませ！ 王子が、みんなが、精一杯努力していることをなぜきみは認めようとしてない！ 彼らの真摯な走りをなぜ否定する！」

とっている。この言葉でハイジがいかに竹青荘のメンバーを信頼しているかがわかった。王子以外に変わりの選手がいないので、タイムが悪ければ文句を言いたくなる走の気持ちもわかる。しかし、そんな中でも全員が努力していることに気づき、そして相手を理解することができるハイジがとてもカッコよく思えた。僕もハイジみたいに仲間を信頼できる人になりたいと思う。このケンカの後、走は除々に仲間を信頼できるようになっていき、他校のメンバーに竹青荘のメンバーをバカにされたとき、そのランナーに走は反論している。

最後にこの本を読んで、高専での生活にたのみかけている僕にとって、これからの高専生活に役立てればと思う。『走る』ということのように、たくさん勉強やクラブ活動に対して自分と向き合い努力し、また、高専での五年間で、人を信頼することができるようになり、また、お互いが信頼しあえるような仲間を作っていけるように、夏休みあけから頑張っていきたい。

『物理屋になりたかったんだよ

ノーベル物理学賞への軌跡』小柴 昌俊 著

『物理屋になりたかったんだよ』

2M 鈴木 耕太

この本は、独自の観測機である「カミオカンデ」を使って世界で初めて超新星からのニュートリノ観測に成功し、ノーベル物理学賞を受賞した小柴昌俊さんが、自身の生い立ちからこれまでの研究人生について語ったものをまとめたものである。題名の『物理屋になりたかったんだよ』という言葉は、実はあの南部陽一郎さんから贈られた言葉だそう。

南部陽一郎さんは、自発的対称の破れの発見により、やはりノーベル物理学賞を受賞した理論物理学の先駆者で、小柴さんは若い頃に南部さんの研究室で「修行」をしたことがあったらしい。そのころ小柴

さんは、勉強で苦勞していたそうだ。ずっと後になって小柴さんが文化勲章をもらったときに南部さんからファックスが届き、そこに「チンパンジーがひっくり返って、そばに本が開いてある図柄」とともに書かれていた言葉が『物理屋になりたかったんだよ』なのである。小柴さんは南部さんに認められた喜びを「いまでは南部さんも私のことを物理屋だと思ってくれるようだ」と語っている。

小柴さんと関わりの深かった研究者は南部さんだけではない。同じくノーベル物理学賞を受賞している朝永振一郎さんにもかわいがられ、アメリカに留学するときの推薦状を書いてもらった。また、その留学先のアメリカで出会ったジュゼッペ・オッキアリーニさんは「相手がどんなに偉い人であっても、必要な時には言うべきことを言うこと、また、実験が予定どおり進行しなかったときの対策をいつも考えておくこと」など、実験を計画する時の基本方針となる考え方を教えてくれた。物理をやる上で父親のような存在であり、小柴さんを国際研究のリーダーに推してくれた。さらにニュートリノの研究ではカミオカンデとライバル関係にあったアメリカにおけるニュートリノの共同研究IMBの幹部のフレッド・ライネスさんは、超新星ニュートリノの観測時刻を争った際に、わざわざ電話をかけてきて、いち早く小柴さんの観測成果を認めた。これにはもちろん、小柴さんが言うように、フレッド・ライネスさん自身の「懐の深さ」もあるが、小柴さんの人柄も大きく影響していると思われる。この他にも、小柴さんの周りには、後に後継者となる若手研究者も含めて、いつも様々な人々が集まってきた。

これについて小柴さん自身は「私は運の良い男で、人生の要所要所で力になってくれる人に巡り会ってきた。」と言っている。しかし、それは果たして本当に運だけなのだろうか。僕はそうではないと思う。

小柴さんは、様々な人たちと出会い、助けられ、協力し、常に人とのつながりの中で、自分の研究を次々と成功させていった。これは、決して運だけではなく、小柴さん自身の人とつながる力によるものだろう。

しかし、小柴さんはいつも人に合わせて争いを避けてきたわけではない。アメリカで前述のオッキアリーニさんから「喧嘩の仕方」を学んだ彼はニュートリノ観測で、「自分たちの方が先に見つけた」と勝手な主

張をしてきた相手に対して、「そんなバカげたことを言うな」と怒鳴りつけたこともあった。

ぼくは、研究者には人付き合いの能力も必要であることを知った。ぼくも、周りの人たちとの関係を大事にしつつ、必要な時には言うべきことをいえる人間でありたいと思う。

『EXILE 夢の向こうの志』稲富治男 著

本物のエンタテインメント

2C 小柳 伊代

この本は、日本のトップアーティストグループであるEXILEの、彼らの心の底にある活動への想いについて書かれたものです。私はこの本を通して、本物のエンタテインメントとはどのようなものかを考えました。

エンタテインメントは、単なる「娯楽」と受けとめられることが多いですが、本来、それ以上に深い意味があります。エンタテインメントのモトの動詞「entertain」には、「人をもてなす」「楽しませる」という意味があり、それこそがエンタテインメントの本質です。EXILEのエンタテインメントは「生きる喜びの表現」であり、さらに「人を楽しませるために自分を楽しむ」という考え方があります。人を楽しませるために、自分が心から楽しむことで、自分も自然に輝くことができます。そして、見ていただく人に喜んでもらい、元気になったり、幸せになったり、夢を抱いたり、何より生きる力を持ってもらうことができます。それが、エンタテインメントの持つ素晴らしい力であり、エンタテインメントをする最大の目的であり、喜びであると思います。また、EXILEには、「Love, Dream, Happiness」という活動のテーマがあります。人それぞれ、この言葉の受け止め方は違うのかもしれませんが、すべての人々に共通する大切な想いでもあります。この言葉は、世代を超えて感じ合い、響き合い、そして絆をつくるものだと思います。「Love, Dream, Happiness」、それは人間にとって必要不可欠な生きる力のみなもとです。

私は、吹奏楽で楽器をやっています。今まで、吹

奏楽はエンタテインメント、自分はエンタテインメントをやっている、などと考えたことはあまりありませんでした。しかし、「人を楽しませるために、自分を楽しむ」という言葉を読んで、吹奏楽も立派なエンタテインメントの一つだなと思いました。そして、自らがそのエンタテイナーにあたることには驚きました。私は、EXILEのように世界中のたくさんの人々に元気を与えたりすることはできませんが、いつもお世話になっている方々、昔お世話になった方々、偶然出会った方々など、身近な人々に楽しんでもらえるような演奏がしたいです。そして、生きる力については大げさかもしれませんが、少しでも、元気になってもらったり、幸せになってもらったり、笑顔になったりしてもらえると、とても嬉しいです。

「人のため」「自分のため」が見事に両立し、分かち合うことが基本になっているこの「エンタテインメント発想」は、人生や仕事、人間関係においても、とても役に立つように思われます。今の日本では、多くの国民が不安を抱えて生きています。自殺者の増加、不況の影響による就職難など、国民が決して幸せを感じて生きているわけではなく、夢も希望もない世の中になってしまいかねません。新しい日本へと歩みださなければならない今、一人ひとりが日本人としての誇りを持ち、確かな絆となり、日本の底力を発揮することが重要となるでしょう。本物のエンタテインメントは、日本を元気にするきっかけになると思います。生きる力を与えてくれるエンタテインメントは、これからの世の中に必要なものであり、重要な役割を果たすものであると思います。

『罪と罰』

フォードル・ドストエフスキー 著 / 工藤精一郎 訳

正義の味方と殺人犯

- 『罪と罰』を読んで -

2C 隅谷 大良

「人を殺してはいけない」とはみんなが信じていることですが、「正義のための人殺し」だとしたらどうでしょうか。実際、「正義のため」となると、

どんなことでも許されるような気がしてしまうのではないのでしょうか。

この、『罪と罰』という本はその反対に、悪人を殺した人が自首する話です。扱っている事柄の重さにしては、物語の内容は暗くなく、登場人物や台詞も多くて読み易いとさえ感じました。とはいえ、読み終わった後とても考えさせられたのも事実です。

主人公のラスコーリニコフは、どうして多くの血を流したはずのナポレオンが人々から称賛されるのかを深く考え、ナポレオンは殺人に伴って何百もの善行をしたのだと結論を下します。次に彼は、ならば自分も同じような事をしたとしても正しいと考え、町で貧乏人から金を吸い取っている高利貸しを殺害して、その金を善行に使おうと企てます。そして実際に殺します。これを読んで私は、彼は何か間違っていると思いました。それでも冷静に考えてみると、彼がした事は、映画などでよく正義の味方がするのとまったく同じ事だとも思いました。悪人を倒したのです。しかし私は喜ばませんでした。

この本を最後まで読んで、ラスコーリニコフは何が間違っていたのかを考えてみると、二つ気付きました。第一に、善を行うためであれ、する権利の無い事を行ったということです。自分の持っている権利を超えてまで人助けをすることはできないと思います。医師でない人は、どれだけ善意があっても、医療処置をすることができないようにです。彼は物事をどれだけ理解していたのでしょうか。しかし彼はまるですべてを知っているかのような様子でした。ナポレオンやその他、血を流しながらも目的を達成しようとした偉人とよばれる人たちが、結局善を行った、と考えたのは彼でした。高利貸しが社会の害となっているので、殺す以外に道はない、と考えたのも彼でした。そして、それを自分ができると考えたのも彼でした。第二に、悪人以外の人も傷付けたということです。罪のない人を傷つける正義のための行動というものは、正義ではないと思います。彼は、現

場に偶然居合わせた、高利貸しの妹も思わず殺してしまいました。また、彼が殺人を犯したということを知って、彼の家族や友人は、深く傷つきました。

ここまで考えてみると、やはり先の、「映画の正義の味方」とラスコーリニコフの差は何なのだろうか、という問題を考えてしまいます。そして、その差はそれほど無いのではないかと私は思います。確かに、「映画の正義の味方」は悪人だけをうまく殺せるかもしれませんが、それにしても、その悪人が死ぬとすべてが良い方向に行く、とどうして言えるのでしょうか。また、誰に権利を与えられて、そうしたことをするのでしょうか。もちろん、映画などの悪人はたいてい、死ななければならないほど悪いものに創り上げられています。しかし、現実の世界では、そのような復讐が完全に公正なものとなるこ

とはまずありません。誰かが見過ごされたり、何かが出来たりするのは。だからこそ、ラスコーリニコフは自首を選んだのです。そのような、人のする復讐の現実が、『罪と罰』には描かれていると私は感じました。こうしたことこそ、「人を殺してはいけない」以上に覚えておくべきではないでしょうか。殺したくなることはなくても、自分で復讐したくなることはあるでしょうから。

図書館の利用にあたっての注意

図書館の本は大切に扱いましょう

時々、付箋が付いたままだったり、中に書き込みがしてあったりする専門書が返却されます。誰か他の人が貸してくれた本に、付箋を付けたまま返しますか？中に書き込みをしますか？図書館の本は、あくまで借り物です。皆の本です。そのことを分かったうえで利用してください。

図書館では静かにしましょう

小声で勉強を教え合うのは構いませんが、時々大きな私語や笑い声が聞こえます。しばらく続くようであれば、注意しに行きます。息抜きでちょっとお喋りしたい気持ちは分かります。でも、静かな館内に、貴方たちだけの声が響き渡っていませんか？貴方が一人で勉強している時、うるさくしている人たちに苛々したことはありませんか？一人一人が気を付けましょう。

返却期限を守ってください

期限内に読み切れなかった本（雑誌）は、他の人に予約されていないければ返却期限を延長することができます。手続きをせず、そのままズルズルと借り続けることはやめましょう。図書の延滞があると、新たな貸し出しはできません。

